

障害者施設における入所者の健康生活の維持・向上をめざした看護活動のあり方

北村直子 古川直美 平岡葉子 杉野緑 北山三津子 (大学) 河村めぐみ (元大学)
近藤有子 安藤和子 戸嶋芳子 加藤智子 脇坂めぐみ 渡辺敦子 (飛翔の里生活の家・健康部)

I. はじめに

本共同研究は岐阜県内の障害者施設(以下施設とする)の看護活動の充実をねらいとして平成15年度に立ち上げられ、平成15・16年度には県内全施設の看護職を対象とした調査や県内施設で従事する看護職を集めての検討会活動を実施した。平成17・18年度は、初期の2年間の活動から施設での看護上の課題のひとつとして挙げられた「健診・検診の充実」に実際に取り組んだA施設の看護職の活動を報告している。この2年間の「健診・検診の充実」への取り組みの中で個々の入所者の健康課題やその影響・要因をあきらかにする事例検討を通して、健診・検診項目の見直しや施設内スタッフ間での健診結果の共有、入所者本人への教育などA施設の看護活動全般の見直しに研究成果が還元された。

今年度はこれまでの実践上の取り組みを継続し、その評価と今後の課題を見いだすことを目的とする。

II. A施設の概要

平成15年度より開所した身体障害者療護施設であり、入所定員30名、ショートステイ定員2名である。入所者の特徴としては、重複障害が多く、脳性麻痺、てんかんの疾患が多い。入所者の年齢は20～57歳で、30歳以上が16名である。

平成18年度半ばより、併設する知的障害者授産施設(入所定員:50名、通所定員:43名)等と組織が統合され、健康部に所属する看護師が複数施設の入所者すべての健康管理を担うこととなり、施設内看護の業務や対象が拡大している。

III. これまでの活動

1. 事例検討活動

1) 平成17年度の活動

(1)目的:入所者の主体的な健康づくりのためにも、入所者個々の特性に応じた健診項目の作成が必要である。そのための基礎資料を作成する。

(2)方法:検討会での討議を通して、入所者9名の個別の情報(既往歴、生活歴、障害の程度、健診結果、健康観など)を整理し、個々の健康づくりに向けた問題・課題を見出す。

(3)結果:検討会は5回行い、A施設の看護職全員がほぼ毎回参加した。事例検討を通して、個々の対象者の健診・検診項目の検討だけでなく、看

護職は入所者の健康を維持するために何を見るべきか、重度の入所者に対応できる看護職自身の力をつけるための方策や他の施設職員との連携を深めるための具体的な方策が討議された。

2) 平成18年度の活動

(1)目的:昨年度から引き続いて、入所者11名の事例検討会を実施し、健康課題をあきらかにする。

(2)方法:事例検討会を継続し、事例検討の内容から個々の入所者の健康問題を抽出し、その要因や影響の拡がりを整理した。また、影響の拡がりの予防に向けて取り組むべき課題を検討する。

(3)結果:11事例の事例検討から抽出された健康問題は、四肢のしびれ、筋肉痛、便秘等腹部症状、脱水、ストレスによる過食、胃潰瘍、毛囊炎等皮膚疾患、肥満、不眠等であった。入所者個々の健康問題の要因や影響の拡がりは図(対象Aの図を図1に示す)に示し、施設内看護師が個々の対象者の把握をするために活用された。また、骨レントゲンの結果などからあきらかとなった健康問題と生活上の注意点などを整理し、施設内の療法士と情報を共有するなどに取り組んだ。

2. グループ学習活動

1) 平成17年度の活動

入所者が主体的な健康づくりに取り組めることを目的に、施設の日課であるグループ活動の中に健康への意識付けのためのグループ学習と健康体操を組み込んだ。グループ学習の中で、体のしくみや健診で何を診るのか、健診の方法等を取りあげ、健診後は結果について関心が持てるように関わりをもった。また、入所者が体を動かすことに楽しく取り組めるように、音楽に踊りの振り付けをつけた健康体操を日課に加え、看護師が入所者とともに身体を動かすことを実践した。このような取り組みにより、がん検診を希望して受診する入所者が増え、入所者自らが自分の体や生活習慣病について看護師に尋ねるなどの変化がみられた。

2) 平成18年度の活動

年3回のグループ学習会を実施した。健診・検診の目的や方法、結果を入所者が理解できることを目的とした内容であり、入所者からは「もっといろいろ学習したい」「毎月学習したい」など学習意欲を示す感想が話された。また、具体的な質

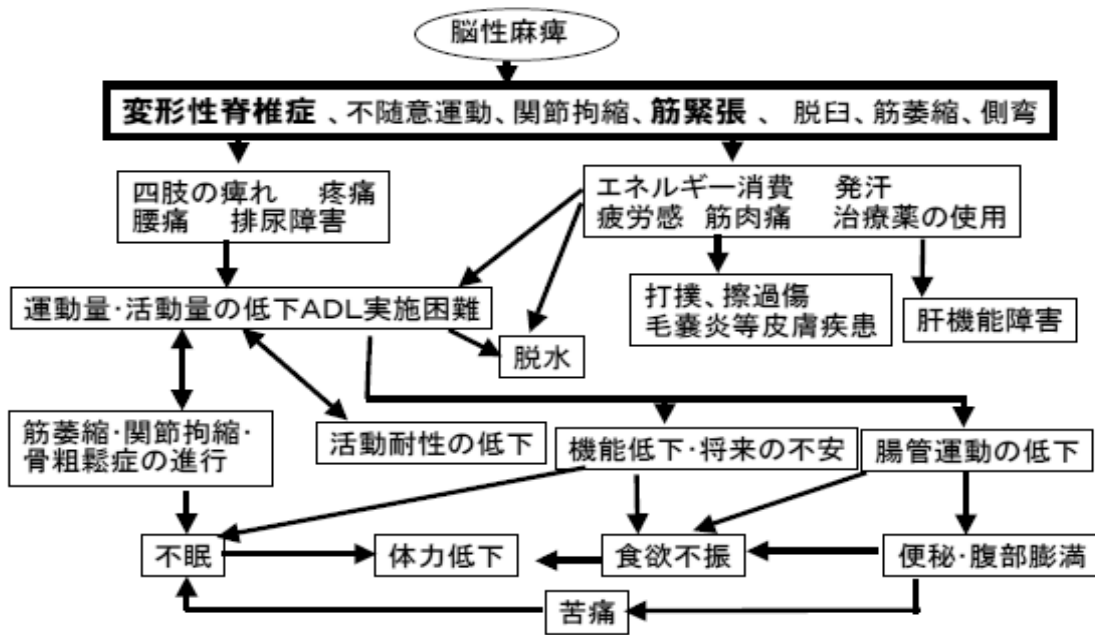


図 事例検討会の内容から明らかにした対象Aの健康問題とその要因や影響の拡がり

問が聞かれ、自身の体への関心や知識が向上していると思われた。

IV. 今年度の活動

平成17・18年度の2年間で検討し取り組んできた11名の事例検討から見いだされた健康課題に対する対応策の実施を日々の看護実践の中で可能な限り行った。また、定期健康診断、平成17年度から実施した腫瘍マーカー検査を引き続き実施した。昨年度までは、健診やがん検診の目的や方法、健康について入所者の理解が深まるよう看護師が説明する方法でグループ学習を行っていたが、今年度はグループ学習の内容を自らの体のしくみについて知ること、入所者の主体的な学習とすることに重きをおき、人体模型の組み立て（アーサーが教える体のふしぎ アセット・コレクションズ・ジャパン）を導入し、入所者が適宜取り組めるようなやり方とした。

V. 方法

検討会で、平成19年度の健診・検診の実施の振り返り、入所者個々の健診・検診結果及び日頃の体調・健康状態の振り返りを行い、A施設での看護活動の今後の課題を見いだした。

また、グループ学習に参加している入所者を対象にア. グループ学習の感想、イ. 健康・生活への不安、ウ. 生活の楽しみや希望、について看護職が聞き取りを行い、その内容を検討会で共有し、そこから今後の課題を見出した。

VI. 倫理的配慮

事例検討およびグループ学習会参加者には、研究の目的、方法を個別に文書を用いて説明し、可能であれば書面で同意を得た。障害等によって、対象者本人が自分の利益・不利益について十分判断することができない可能性を考慮し、対象者の保護者にも研究参加の同意を得た。また、本研究は本学の倫理審査部会の承認を受けて実施した。

VII. 結果

1. 健診・検診の実施の振り返りと課題

施設内で行う健診においては業者の協力を得て、車椅子使用でのレントゲン撮影の導入や入所者の状況を理解したスタッフが採血を実施するなどができるようになっている。

しかしながら、子宮がん検診では麻痺や筋緊張、関節拘縮などの症状により診察台に乗ることが難しい、また、障害者への理解が十分でない検診医の対応もあり、入所者が不安を感じ、スムーズに検査できない状況もあった。入所者への事前の説明に加え、すべての検診機関との打ち合わせ等を含めた連携の強化が課題である。

2. 入所者の健康問題の振り返りと課題

入所者の高齢化により、入院や通院、日常的な症状観察・管理など、医療的な対応に看護師が時間をとられることが多くなっている。また、施設の組織体制として、これまで2つのユニットそれぞれに看護職が配置されていた体制から健康部

に所属する看護師が2つのユニットをローテーションする体制へと変化した。そのため、個々の入所者の把握が十分でないこともあり、予防的な働きかけができない状況が生まれている。したがって、今後、2ユニットの全入所者の健康状態を健康部として確実に把握することを第一の課題とし、高齢化からもたらされる活動低下による廃用性の障害にも予防的な働きかけができるよう取り組みたい。

平成18年度の骨のレントゲン結果からは椎間板ヘルニアや脱臼等骨の異常が多くみられている。その結果から神経障害や転倒のリスクなど個々の入所者の健康問題をあきらかにし、生活上の注意点、支援員の関わりなどを支援員とも共有した。共有した内容がスタッフの日常的な実践に活かされているか評価していく必要がある。

現在、全入所者32名中がん罹患が3名であり、今後も検診によりがんと診断される入所者が増えることが予測される。がんの治療選択や決定について本人や家族が主体的に参加できるような関わりが必要となっており、医療機関受診後の家族へのフォローなど家族との連携が重要となっている。また、障害により症状の訴えがわかりにくいことからがんの早期発見を可能にするためには検診の充実のみでなく、看護師やスタッフのアセスメント能力の向上が求められる。

3. 入所者から聞き取った内容とそこからみた課題

1) グループ学習の感想

グループ学習の参加者からは「身体の中がわかっておもしろい」「臓器の形がわかった。ビックリした」「自分のからだはすごいと思った。」などの肯定的な感想と「気持ち悪い」「難しい」などの否定的な感想が得られた。入所者の自主的な学習会であり、看護師が学習時に個別に関わることができなかったため、参加者の理解力や関心度により感想に違いがあったと考えられる。関心をもって取り組める入所者にとっては主体性をもって取り組めるよい学習方法であったが、そうでない入所者に対しては別の方法での学習方法も検討する必要がある。

2) 健康・生活への不安

「だんだん足の感覚がなくなっている。これからが心配」「かぜや熱が出ると怖い」「今の生活にストレスがある」「何でも自分でしたいけど動けない」「高齢の親が心配」など、今後の健康状態悪化への不安、現状の生活への不満、高齢の親の心配などが対象者から話された。入所者自身

が今後の健康状態に不安を感じており、施設内看護職による障害の重度化や二次障害を防ぐ取り組みが求められているといえる。また、家族への心配も入所者の精神の安寧を揺るがすものであり、施設スタッフが入所者の家族の状況を理解し、家族を含めてケアすることが求められている。

3) 生活の楽しみや希望

「施設以外の人と関わりたい」「自分の力を試してみたい」「外で働きたい」「自立して1人暮らしがしたい」「旅行に行きたい」「喫茶店に行くのが楽しみ」など、外部との関わりや自立を希望する意見が多くだされた。これらの入所者の期待に応えられるサービスの提供について施設全体での検討が必要である。

4. 看護実践上の成果

平成17・18年度においては、施設内看護職のほぼ全員が参加する検討会を行った。その結果、事例検討を行った入所者については個々の健康問題や課題、ケアについて施設内全看護職が共通の情報を持つことになり、ケアを統一することが可能となった。また、個々の入所者のケアだけでなく、検討会の中では障害者施設における看護職の役割について討議されることが多く、その役割は「生命・健康の維持を基盤とした上で入所者の生活が充実できるように支援することである」との認識が施設内看護職間で共有できた。さらに、今年度は入所者に健康・生活への不安や楽しみ・希望を看護職自身が直接聞き取ったことで、入所者の生活を充実するために取り組むべき問題や課題について看護職が実感し、取り組みへの意識が高まった。

Ⅷ. 共同研究報告と討論の会での討議内容

討議への参加者は共同研究者を含め、8名であり、他の障害者施設からの参加者は極少数であった。県内の障害者施設看護職への参加を求めるアナウンスの強化を次年度以降は行いたい。

話し合いの内容は以下の通りであった。

1. 障害の重度化・二次障害の防止、生活習慣病発症予防のための活動について

他施設においても、がん罹患者の増加、高齢化による重症化、活動低下がみられているということが出された。なかでも、嚥下障害により胃瘻造設を行う入所者が増え、看護職が医療処置に時間をとられることが増えているとの話がでた。

がん検診については必要性を感じるが、導入していないという施設もあり、看護職が必要性を施設側に伝えていくことの大切さと地域の行政サービスを活用できるよう行政と連携をもつこと

の重要性が話された。

2. その他

他の施設での問題や課題として、障害者と施設スタッフとの人間関係形成の困難さが話された。特に事例としては、障害が進行している入所者からスタッフへ厳しい言葉が発せられることがあり、スタッフが十分受け止めることが難しい状況がみられる現状が話された。この話題の中で、中途障害者が障害受容することの困難さや障害受容の過程についてスタッフが理解することの重要性が検討された。また、看護職者が入所者との人間関係を築くことだけでなく、介護スタッフを支援、教育する役割などをとることが話された。

